1992-6-①

朝日新聞（夕刊）
1992年（平成4年）2月17日　月曜日

しごとの周辺

橋爪大三郎

「しごとの周辺」ていう題で何か書いて下さいなんて、本業で手一杯の人間には頼まないものだ。よほど怠けていると思われたのだろう。まあいい。

大学に勤めて丸三年になる。それまで、いわゆるオーバー・ドクターというのを十二年やっていた。それが習い性となって、いまだに勤め人の実感が湧かない。大学は本職、でも本業はもの書きと思っている。で、仕事の「周辺」扱いで申し訳ないのだけれど、大学のことを書かせてもらうとしよう。

勤め先の東京工業大学は、目黒区の大岡山にある。もとは郊外だったらしいが、自由が丘から二駅、住宅街のまん中だ。

ここから目と鼻の先にある小学校を卒業したので、近所の様子なら昔から知っている。夏になると朝礼で、東工大のプールで泳がないようにと校長が注意した。金網を潜って忍びこみ、背が立たなくて溺れ死んだ子供の幽霊が出ると、まことしやかな噂である。何と怖い大学だろうと、白い時計台を見上げていた。まさかそこに勤めようとは夢にも思わなかった。

大学に勤める

キャンパスはかなり広くて、建物が何十も並んでいる。そのひとつ、築後三十年とおぼしいビルの一部屋が割当てられた。約二十平方㍍、賃料なら月十万円はする。おまけに個人研究費が毎年約百万円。全部自腹だったのと比べれば、雲泥の差だ。世の中の不公平をつくづく実感。

書架やスチール机は、中古で余っていたのを貰（もら）い、ただで揃った。これだって、買えば何十万円もする。ワープロだけは新品を奮発して据えつけ、いちおう研究室らしくなった。

（社会学者）

1992年（平成4年）2月18日　火曜日

しごとの周辺

橋爪大三郎

勤め先、東工大の最寄り駅は大岡山。終電は十二時ちょっと過ぎだ。でも「今日中にFAXで願います」なんていう原稿を書いていると、終電に乗りそこねてしまう。仕方なくソファで仮眠、の毎日になりかけた。

これではいけない。仕事を減らす代わりに、私設のアシスタントを探すことにする。試しに「とらぼーゆ」に広告を出したら、二十一人の応募があった。面接とテストの結果、一番文章のうまいTさんを採用する。

彼女は米国の大学卒で、英語が話せるしパソコンもできる。雑誌編集の経験もあって申し分ない。おかげでひと息ついた。

と喜んでいると、「お給料のことですけど」と言われてギクリとする。時給千二百円じゃ安

アシスタント

かったなあ。結局四百円のベースアップで、毎月私の給料袋の半分強が消えることになった。

朝は苦手らしく、昼過ぎか夕方にふっと現れる。用がある時はさっさと帰ってしまう。仕事が嫌いではないが、特に好きでもないらしい。毎日学生食堂で三百十円ランチの私を尻目に、もっとずっといいものを食べてるみたいだ。そんなTさんを、私は何となくネコに似ているなと思ってしまうのである。

ところでTさんは、この大学が大好きである。特に学生を、こんな素直で勉強好きな子たちはいないと、手放しの褒めようだ。ここに来るまで東工大の存在を知らなかったらしい。アピールの仕方が下手なのよ、広報を私にやらせてくれればな、とぶつぶつ言っている。理工系離れが言われるなか、彼女みたいなファンが増えれば、学生諸君も張り合いがあることだろう。

（社会学者）

1992年（平成4年）2月19日　水曜日

しごとの周辺

橋爪大三郎

ジリリと内線のベルが鳴る。思わずビクッとする。また何かしくじったろか？　私は「文部教官」、法令や規則に従わなければならない立場なのだ。

勤務歴ゼロの私は、出張願の出し方から手取り足取り教えてもらわないと何もできない。特に研究費（校費）には神経を使ろう。少額なら、生協でサインで買えて便利なのだが、クリップや封筒など勝手に買えないものもたくさんある。経費節約のため大学で一括購入しているからだ。

研究費の使いぶりを、事務でぬかりなくチェックする。

「この、ポケットティッシュ六十円というのは何ですか」

「はあ……」と絶句する私。

「機械工学科なら油を拭くからわかります。でもねえ――」

研究費のムダ

ワープロのトナーを拭くので買いました。そうなのだが、自分の鼻もかんだことを思い出して、声がのどに絡まってしまう。

総定員法のかた、事務職員は減る一方。なのに仕事は増え続ける。金づかいがだらしない教官もいたりして、しわ寄せの集中する事務官は大変なのだ。

でも、規則でがんじがらめにすれば、研究費が有効に使われるかというとそうでもない。

私の場合、大事な本は研究費で買わない。自分で買う。図書館に登録されれば、異動のとき置いていくのが規則だから。退官した先生方の蔵書は、図書館地階に放りこんであるという。

本を買わないとなると、ほかに使い途がない。無理に備品を買えば、また無駄である。

大学には、研究の足を引っ張る規則が多すぎる。早く何とかしないと、いよいよ「知識の棺桶」になってしまう。

（社会学者）

1992年（平成4年）2月20日　木曜日

しごとの周辺

橋爪大三郎

東工大の一学年は千人強。マンモス大学まで行かないが、昼休みの食堂はかなりの混雑だ。

講義も大教室ばかりでは気の毒だというので、人文社会系には少人数クラスがある。私の担当する一年生は社会（科）学のグループ研究。農業班あり、教育班あり、わいわい騒いでいるうちに一年経ってしまうので、手抜きができて助かっている。

キャンパスでは一年生がいちばん元気がいい。今年は特に元気がよくて、自衛隊班の諸君は、護衛艦、戦車、輸送機に乗り放題の体験ツアーに応募し日本中を飛び回ってきた。ほかの班も頑張って、年度末に印刷した研究報告書が分厚い力作になったのは言うまでもない。

自衛隊ツアー

上級生向けには、講義の合間にモスクの見学会を実施。「比較宗教社会学」の時間に声をかけたら、雪の降りしきる金曜日の早朝に学生諸君が三十人も集まった。最近の若い人は、宗教にとても関心があるらしい。モスクに入り切れず、裸足で水たまりにひざまずき熱心に祈りをささげる信者の姿に、少なからぬショックを受けていた。

外国からの留学生もかなりの数にのぼっている。外見ではわからないが、すれ違いざまに中国語や韓国語を小耳にはさんだりすると、思わず頑張れよと励ましたくなる。東京の物価高、アパートが借りにくい、習慣の違い、……。私自身留学生の保証人をしているが、日本側の受け入れ態勢の不備を痛感した。学費に苦労している留学生のため、ティーチング・アシスタントや学内事務のような手頃な収入の機会を、大学で用意できないものか。

（社会学者）

1992-6-②

1992年（平成4年）2月24日　月曜日

しごとの周辺

橋爪大三郎

東京工業大学を英語に直すと頭文字はTIT。マサチュセッツ工科大（MIT）のむこうを張って、来世紀、世界の科学技術をリードするのだそうだ。

これは、とっても素晴らしいことだと思う。

それには、優秀な人材にどんどん集まってもらわないといけない。公募が一番だ。

東工大でも、教授・助教授は公募されているようなので、なるほど、と納得していた。ところがどうもおかしい。

教授会で選考経過を聞いていると「公募したら応募者ゼロでした」の説明にびっくり。自慢じゃないが私の机の引き出しには「残念ながら貴意に沿いかねます」という落選通知が何十枚も束になっている。公募のチャンスを待つ若手は全国にゴマンといるはず。応募ゼロなのはちゃんと知らせてないからだ。学内掲示板に紙きれ一枚貼っておくみたいなやり方じゃだめだ。

応募者ゼロ

応募ゼロの場合、仕方ないから、選考委員が心当たりや意中の人を推薦することになる。ここから先は推測である。

大学の先生にしてみれば、研究室で手塩にかけた学生は可愛いだろう。何とか一人前にしたい。まして優秀なら、ぜひ自分の後継者に、と考える。

でも、ちょっと待って。そんなことではMITになれない。人情をぐっと押さえ、見ず知らずの優秀な人間を本気で探す。外国人もどんどん採用する。それをやらないと、ちんまりまとまった大学になってしまう。

大学のポストは公共の財産。それを最大限に活用するのは大学人の義務だ。公募をまじめにやれ、と私は言いたい。

（社会学者）

1992年（平成4年）2月25日　火曜日

しごとの周辺

橋爪大三郎

私の研究室には、雑誌社や出版社の編集のひとがしょっちゅう出入りしているが、たまにはめずらしいお客さんも見える。去年はじめて、外国人ジャーナリストの訪問を受けた。

外国ではもちろん無名の私である。どこで名前を知ったのか不思議に思って、間に立った外務省の外郭団体の人に聞いてみると、先方の指名だという。約束の時間にパキスタン人の新聞記者、N・ナスルラー氏が通訳の女性を伴って現れた。

眼が大きくて、人なつこそうで、しかもジャーナリストらしい。会ったとたんにウマが合ってしまう。でも私は英語が話せない。通訳を間にはさんで、英語の質問に順に日本語で答えていく。なかなか有能な通訳で、ほぼ正確に訳してくれる。

遠来のお客さん

彼は日本が初めてで、大づかみだが的を突いた質問をした。こちらも大づかみに答える。ちんぷんかんぷんなずいている。

こんなとき、アシスタントのTさんは便利だ。彼女がお茶を入れ、英語であいさつすると、おおどこで習ったと話が弾む。それから皆で写真を撮った。

最後に私の名前をどこで聞いたかと尋ねたら、外務省で教えてもらったという。仲人口とはこのことだと思った。

しばらくして写真が届き、今年になってパキスタンの新聞が送られてきた。Tさんと彼と私と三人の写真を真ん中に、私のしゃべったことが英語でいろいろ書かれている。何の縁もなかった国と、こんなつながりが出来て不思議な気がする。

Tさんはいま、この文章を英訳している。記事のコピーと一緒にパキスタンに送るためだ。

（社会学者）

1992年（平成4年）2月26日　水曜日

しごとの周辺

橋爪　大三郎

東工大では、毎年八月に編入学試験をして、高等専門学校の卒業生を受け入れている。

高等専門学校は、理科系の五年制で、高校に大学一、二年を継ぎ足したようなもの。ここを卒業して勉強を続けるには、編入学試験が頼りだ。

ところでこの入試、専門の試験のほかに、国語、外国語、それに社会科が二科目もあって、ちょっと受験生に負担が大きすぎるなあ、と気になっていた。

昨年の春、機会があって「社会科の試験が二科目も必要だろうか、専門の成績がよければいいのでは」と聞いてみたら、皆そう思っていたらしく、あっと言う間に二科目から一科目になった。そのせいか、受験者は倍増、合格者もかなり増えた。

編入学試験

そのあと、そもそも社会科は入試から外してもいいんじゃないかと思えて来た。学内の規則を変えないと無理みたいだったので聞いてみると、そんな規則はいつでも変えられるという。うまくいけばこの夏の編入学試験は、社会科なしになるかもしれない。高専の皆さん、ぜひ東工大を受けてください！

そこで、教訓その一。惰性で続いているだけで、実は変えてもいい規則がけっこうある。そういうのはどんどん改めよう。

教訓その二。高専だけでなしに、アメリカン・スクールの卒業生や、天才的な中高生、社会人など、いまは事実上門前払いになっている人びとを、もっと柔軟に別枠で受け入れることができるのではないか。誰に入学を許可するかは、大学の裁量にまかされているはずだ――というあたりのことを、じっくりと調べてみたい。

（社会学者）

1992年（平成4年）2月27日　木曜日

しごとの周辺

橋爪　大三郎

国立大学の学部・大学院に足かけ十年在籍した私でも、東工大に来てからはとまどうことの連続だ。で、気の早い私は思ってしまう、この大学は国立である必要があるのだろうかと。

国立だから、教授も助教授も国家公務員。ほかの公務員と一緒の法令に拘束される。いちおう当然のことではある。

けれどこの仕組みを考えたのは、「研究」がどんなものか、まるで知らない人物だったに違いない。研究は、朝八時半から午後五時までの枠に収まるわけもないし、費目通りに毎年順調に予算を消化できるものでもない。でも国立大学では、こういうことが大事なのである。

国立大学は、外国におくれをとるまいと明治政府があわててこしらえたもの。政府の役人は、実力のない日本の学者が創造的な業績をうむはずがないと、心底みくびっていた。下手にものを考えるひまに役所の言うことをよく聞いて、せっせと外国の知識を輸入しろと思っていた。

希望はまだある

今はもうそんな時代でない。なのに、管理すればいいという体質はそのまんま。大学人はそれに抵抗して、組織の防衛をはかる。そんな綱引きで、国立大学は身動きとれないでいる。

大学の目的とは何だろう。優れた知性に活躍の場を与え、大勢の留学生にも来てもらい、知識と人材を社会に送り出すことではないのか。そのための制度や規則のはずだ。国立大だと制約が多すぎるのなら、私立に衣がえするのも一案だろう。

いま大学に、問題はあまりに多い。が、まだ希望もある。特に学生諸君を見てそう思う。希望のなくなる日は、私が国立大学にいる理由もなくなる日だ。

（社会学者）

……

次回からの筆者は舞台美術家の朝倉摂さんです。